

2014年1月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

月平均500 hPa 高度を見ると、極うずは分裂し、カナダ東部とシベリアに位置した。太平洋からヨーロッパにかけては正偏差と負偏差が交互に並ぶ波列パターンが卓越し、北米中・東部やヨーロッパの西海上では明瞭なトラフ、北米西岸、ヨーロッパ北部ではリッジとなった。中国から本州の東海上にかけては東西に広く正偏差となった。亜熱帯ジェット気流は中国で北に蛇行し、寒帯前線ジェット気流は本州付近で平年の位置に比べて北寄りだった。アリューシャン低気圧は本州東海上で平年より弱く、シベリア高気圧は東への張り出しが平年より弱かった。

熱帯の対流活動は、フィリピンの東、太平洋西部の赤道域で平年より活発、インド洋東部、太平洋中部では不活発だった。赤道季節内振動は不明瞭だった。対流圏下層では、インドネシア付近から西部太平洋赤道域で月後半を中心に西風偏差が明瞭だった。対流圏上層では、中国南部や日本の南東で高気圧性循環偏差と

なった。南方振動指数は+1.1だった。

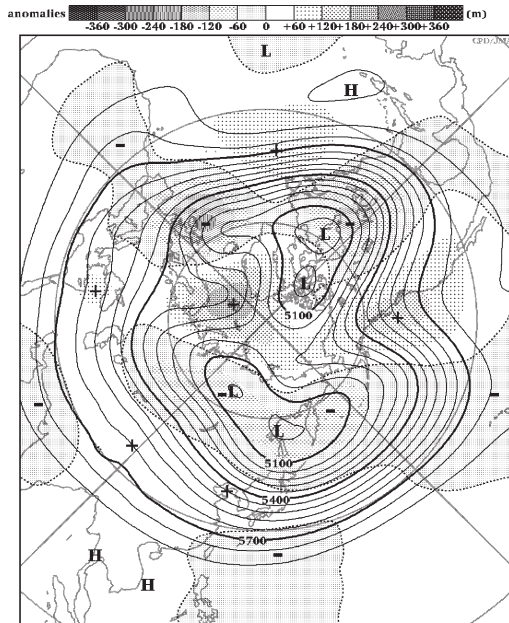
世界の天候

2014年1月の世界の月平均気温偏差は+0.18°C（速報値）で、1891年の統計開始以来、5番目に高い値となった。1月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.72°C/100年（速報値）である。

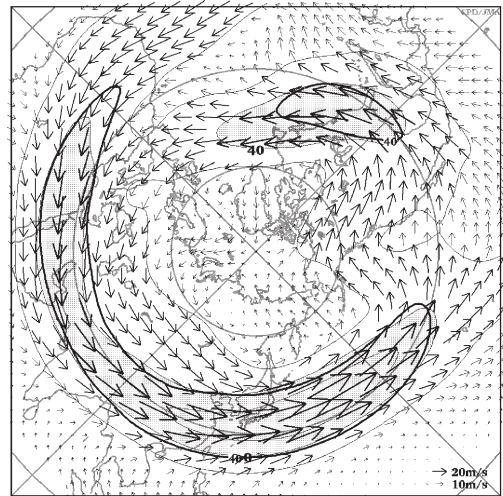
主な異常天候発生地域は次のとおり。

- モンゴル東部～中国東部では異常高温となった。
 - ヨーロッパ西部では異常多雨となった。
 - 米国東部～メキシコ北東部では異常低温となった。
- （気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課）

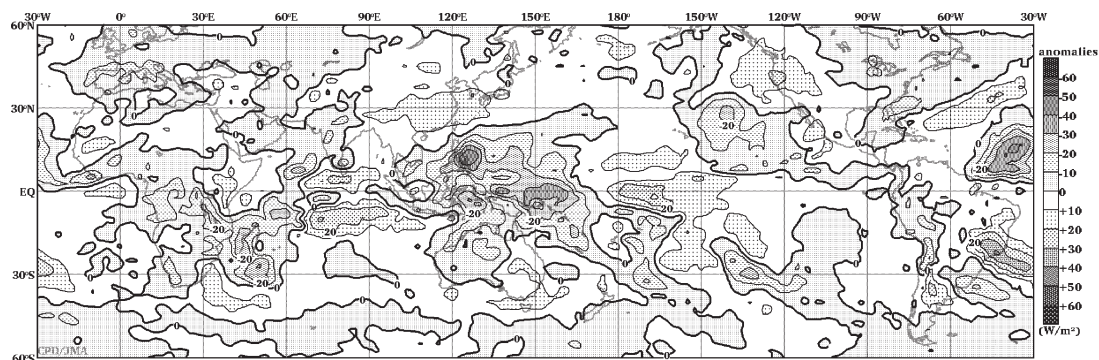
※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。
<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



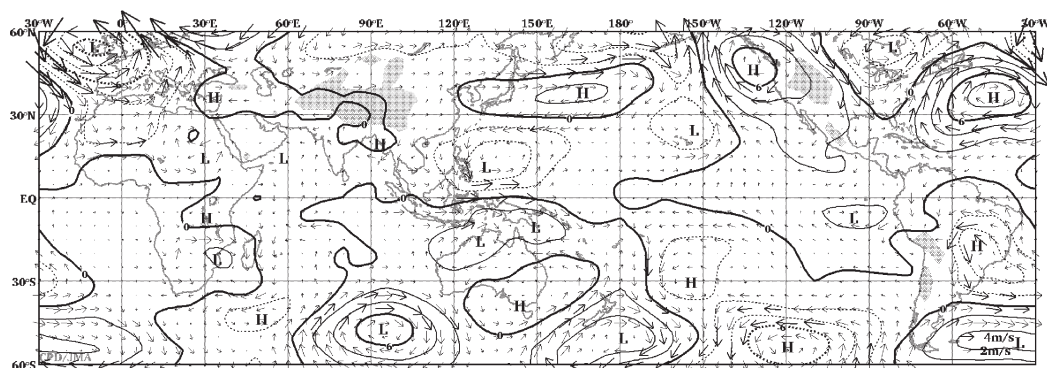
2014年1月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差
 等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1981～2010年のデータから作成。



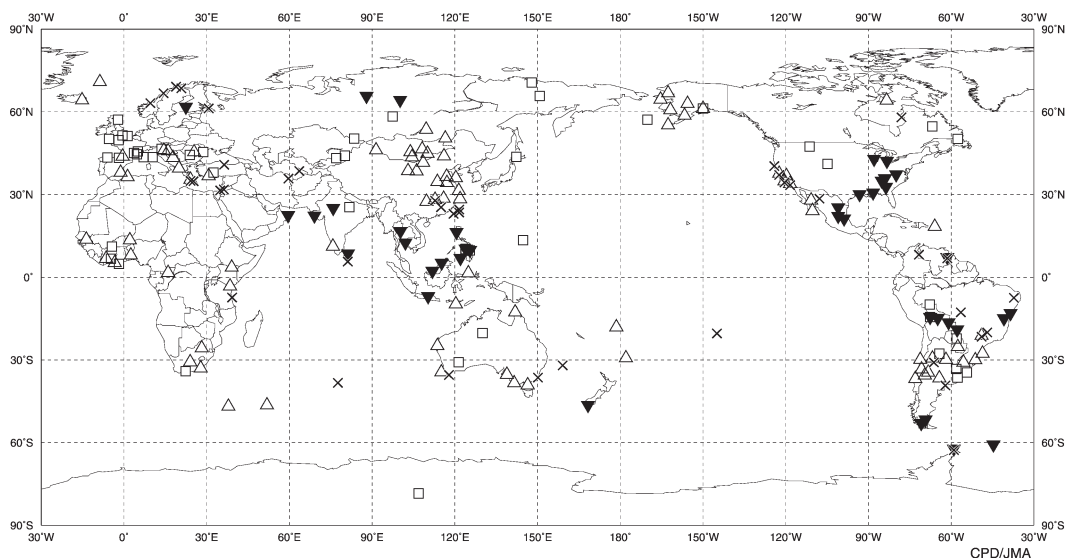
2014年1月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル
 等値線間隔は20 m/s。陰影部は40 m/s以上。太実線で囲まれた領域は平年の40 m/s以上の領域を示す。平年値は1981～2010年のデータから作成。



2014年1月の月平均外向き長波放射量年偏差
等値線間隔は10 W/m²で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データはNOAA。年偏差は1981~2010年のデータから作成。



2014年1月の月平均850 hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル
流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1981~2010年のデータから作成。



2014年1月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超えた場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。